

サージャント先生のご退職に寄せて

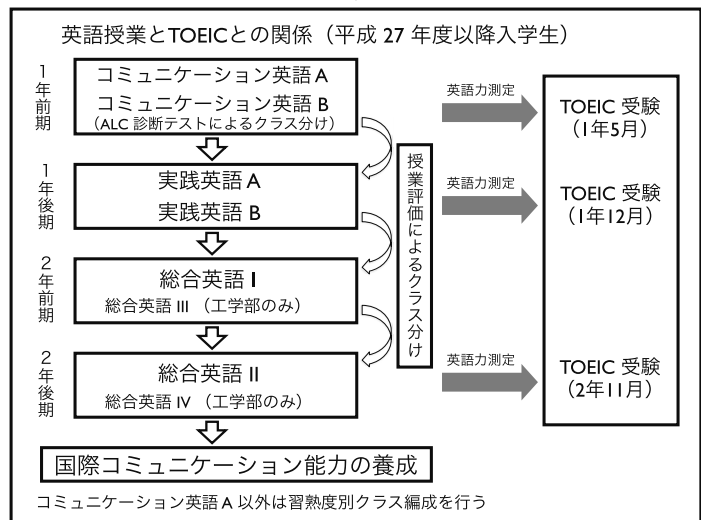
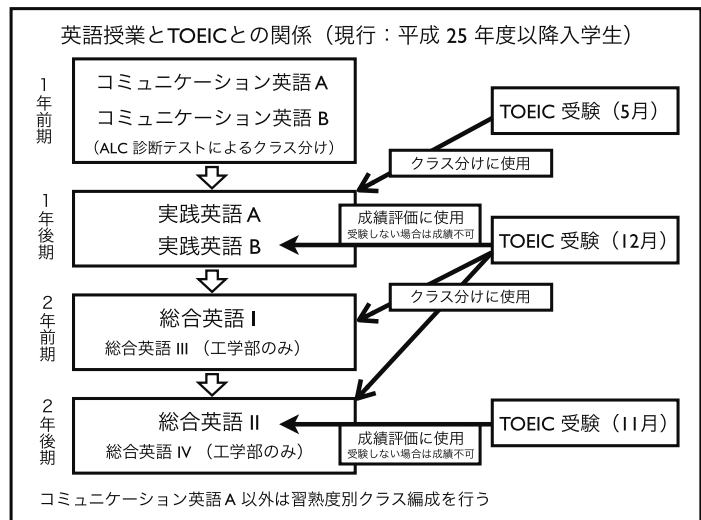
藤 村 薫

この度、トレヴァー・サージャント先生がご健勝で大過なく定年退職をお迎えになること、まことに大慶に存じます。長年にわたって鳥取大学の英語教育を強力に牽引してくださったサージャント先生に、この場をお借りして心からお礼申し上げたいと思います。

教育センター紀要がサージャント先生のご退職記念号として出版されるので寄稿するようにと、編集委員の瀬戸邦弘先生から強いお勧めがありましたので、少し述懐してみたいと思います。

サージャント先生との出会いは私が工学部の教務関係の仕事をはじめた2007年以降で、教員選考委員会や「総合英語 III, IV」に関する意見交換会などで一緒しました。その後、2013年から4年間、教育センターの仕事に就いたためサージャント先生との関わりが増え、何度も先生の研究室にお邪魔してお話させていただいたのはとても良い思い出です。

サージャント先生が英語教育に残してこられた偉大な足跡はご自身が本紀要に詳細をお書きになっておられますが、なかでもTOEICを全学共通科目の英語単位認定から分離されたことは特筆に値します。かつては「コミュニケーション英語 IIB」(のちの「実践英語 B」)の単位認定



に授業科目の成績 60 点以上に加えて TOEIC スコア 300 点以上が求められていましたが、グローバル人材育成事業が採択された翌年の 2013 年度入学生から TOEIC300 点以上の要件が外されました。図は、2014 年 12 月に開催された教育支援委員会の配布資料として当時教育支援課副課長であった長村好恵さんがお作りになったもの（をもとに本原稿用に若干修正）で、サージャント先生が取り組まれた改革の要点が簡潔にまとめられています。

TOEIC の取り扱いはその時々で最善の策が講じられてきましたが、TOEIC で主に測られるのはリーディングとリスニング能力であるため、4 技能を等しく涵養する英語教育の学習成果を測るのには適さない、TOEIC スコアには± 70 点が標準誤差として想定されているため、これが成績評価結果を左右しかねない、授業でいくら高い成績をとっても TOEIC を受験しなければ単位が出ないのは理にかなわない、などといった問題を抱えていました。また、学生からは、TOEIC 受験の際に手を抜くと、TOEIC スコアにもとづく習熟度別クラス編成で低いクラスに振り分けられるので、楽に良い成績を得ることができるといった話も漏れ聞こえてきました。

サージャント先生は、TOEIC スコアを英語の成績評価から完全に分離し、TOEIC は学生が自らの実力を知り、向上に向けて努力する際の指標を得るために受験するものであると位置づけた今日のスタイルに修正することを提案されました。2012 年度にスタートしたグローバル人材育成事業では TOEIC スコアについても高い数値目標が掲げられていたため、2016 年度末の事業終了前にこのような改革を行うことは非常に勇気の要ることでした。実際、学内では強い反発もあり、本学における英語教育を疑問視する向きさえありましたが、2014 年の 9 月から教育支援委員会と意見交換会において繰り返し討議を重ねて、相手が納得するまで丁寧に説明をされた結果、12 月の教育支援委員会で最終的に承認されるに至りました。また、1 年後期以降の習熟度別クラス編成も、TOEIC スコアに基づく 5～6 レベルのクラス分けを廃止して、授業評価結果を用いて中級者と上級者に二分することにより、英語力の低い学生にやる気を出させるよう工夫されました。さらに、米子キャンパスの医学科学生に対しても、湖山キャンパスと同様の質の高い英語教育を提供するために尽力されてきました。

4 年間、近くで拝見していつも感心したのは、サージャント先生の英語教育に対する情熱と、どのような局面においても礼節をわきまえて柔和な態度を崩されることがない紳士的なお人柄です。また、サージャント先生のお話の論旨はとても明快で、つねに熟慮を重ねて理詰めで議論に臨まれました。出たとこ勝負で、しかも自分の主張に一貫性がない私などは、つねづね見習わなければならないと肝に銘じているところです。

サージャント先生に共通教育棟の研究室でおめにかかれなくなるのは残念ですが、今後は教育センターの外から英語教育に対してご指導、ご助言をいただけると幸いです。

最後に、本学の英語教育に対して 28 年間にわたって多大な貢献を続けてこられたサージャント先生に深く感謝するとともに、サージャント先生の今後ますますのご健康とご活躍を祈念して、この拙文を終えたいと思います。